

潮来市の誇れる文化

第144回

地蔵河岸の常夜燈

常夜燈は、竜雲山普門院普渡寺の地蔵堂と地蔵河岸を結ぶ直線上の河岸より立っています。造立は文政元年（一八一八）八月。二百年以上前のもので、現存する市内の常夜燈では最も古いものです。竿石の前面に「船越地蔵尊」、後面に「常夜燈と彫られています。船越とは、地蔵和讃と地蔵に守られ、此岸から浄土の対岸へ渡ることありますので、それから名付けられたものと思われる。費用は、延方始め各地の人々二百四人と潮来村、大洲村、徳島村、大島村等から集められました。発願は、竿石から神崎寺十二世僧正得法と延方村方波見何某と判読できます。



地蔵河岸の常夜燈

洲崎前の水路は、古来より水難事故が多く、洲崎地蔵堂は信仰の対象として崇拜されるのみならず、その灯籠は夜間航行上重要な役割を果たしました。また、この地方の人々の生活の上でも重要でありました。昭和二十五年頃までは、地蔵河岸は前川に面し、東側と南側に三十メートル余りの防波堤がハの字型に整備され、その奥にU字状

に五十メートル程の船着き場がありました。数多の物資を積んだ貨物船や高瀬舟が出入りし、米俵・筵（むしろ）・吠（かます）・薪炭等が積み出され、肥料・稲・醤油粕等が荷揚げされ賑わいをみせていたとのこと。昭和三十年代後半、前川の干拓事業が始まるとともに、その役目を終え、変貌した跡地からは当時の面影はなく、この常夜燈が地蔵河岸の名残りを僅かに留めています。現在潮来市文化財に指定されています。

（参考）「利根川下流域の常夜燈」
「ふるさと潮来第三十三輯」
「潮来市の文化財 増補版」

潮来市文化財保護審議会
委員 石津 藤好

潮来市の誇れる自然

第85回

水郷の魚たちーヨコシマドンコ

利根川下流域につながる池沼での調査中に、見慣れない小魚とその稚魚（写真1、2）が採れました。潮来市内の湖や川にいる小さなハゼ類（漁師さんは「ゴロ」と呼ぶ）と似ていますが、口が小さめで体が平たくて、腹びれが左右に分かれています（ゴロだと左右が合わり吸盤状になる）。体の側面に横縞（よこじま；体の背腹方向に走る縞模様）があります。これらの特徴から、中国・朝鮮半島原産の外来魚ヨコシマドンコとわかりました。

ヨコシマドンコは中国では水生植物が繁茂した湖に多く生息していますので、日本でもそのような水域に侵入すれば大増殖するかもしれません。成魚でも5cmほどと小さく、エサは水生昆虫や動物プランクトンなどですが、高密度に生息するようになりますと、生息場所やエサを巡って生息がよく似た在来魚と競合するおそれがあると考えられています。日本では2000年に愛知県の河川ではじめて見つかりました。輸入される淡水魚種苗や釣りエサ用活きエビに混じって入って



(写真1) ヨコシマドンコ成魚



(写真2) ヨコシマドンコ稚魚

きたと考えられています。茨城県では2010年に県西部の湖沼で見つかったから、利根川水系づたいに少しずつ分布が広がっています。やがて霞ヶ浦・北浦にも現れるかもしれません。茨城県の外来種データベースに掲載されており、未侵入の地域では早めに発見し防除することが大切とされています。私たちも情報を収集しつつ動向を注視しているところです。

茨城大学地球・地域環境共創機構
水圏環境フィールドステーション
加納光樹
内田大貴
(株)環境指標生物